# 国　　語

## 教　生　雑　観

田　辺　啓　三

### はじめに

教生については，一般の高等学校ではあまり意味がない。しかし，わたくしは，この数年，大学法文学部国文専攻の教生を預かって，いつも深く感ずることは，わたくし自身，国語教師として,至って未熟であるということである。学問の道の深く,教育の業の極まりないことを思う時，生硬そのものの教生の姿の中に，ともすれば，われわれが長年の惰性のうちに見忘れていた，自己の欠点を見出し，深い悔恨の情に打たれることがしばしばある。かの世阿弥は，「初心忘るべからず。」という名言る遺している。時々振りかえって今の自己を見つめる事が，やがて明日の前進ともなろう。この小論が，そんな意味で少しでも現場の教師の参考ともなれば幸である。

教生の実習期間は三週間，はじめの三日ぐらいは授業参観や，いろいろな講話に使っているので，約十名の教生が，実際に授業を担当するのは8時間ぐらいである。その三週間の彼等の実態を，生徒の批判，教生自身の反省，教師が見た姿等，いろいろな角度から拾ってみたい。特別新しい意見も問題もない。ごくありふれた内容ではあるが，わたくしの意とする所は，前に述べた点にある事を，あらかじめおことわりしておく。

### 生徒の目は

生徒の目はこわい。その批判は鋭い。そして多くは正鵠を得ている。ともすれば，わずか三週間の交際で，その見かけに迷わされて，われわれが判断を誤まるような時があっても，生徒はその教生の真価を正しく摑んでいる。ただ生徒の判断の基準が，未熟な経験からくる，目前の好悪に動かされやすい甘さのある事もいなめない。しかし，多勢の生徒の目は，実に的確な場合の方がはるかに多い。以下，そのおもなものをあげてみる。

#### (1) 教生の実力について

どんなに態度が立派そうに見え，話しぶりがうまくても，もし教生に，実力が欠けていたら生徒はついてこない。その力を教生に望むことはいささか無理かもわからない。一応，教生の不勉強などを指摘している，生徒の反応を次に示してみる。（以下の表は一，二学年は3クラス，三年1クラスの生徒の感想をまとめたものである。）

| | 1年 | 2年 | 3年 |
|---|---|---|---|
| イ 信頼感が起きない。 | 15 | 13 | 2 |
| ロ 予習不足である。 | 10 | 4 | 2 |
| ハ ノートばかり見て話す。 | 9 | 4 | 0 |
| ニ 範読に読み違いがある。 | 10 | 0 | 0 |
| ホ 質問の答があいまいである。 | 4 | 18 | 0 |
| ヘ 文法の説明が不十分である。 | 12 | 5 | 5 |

授業をする時，教卓の後に立ったまま，教科書の書込みや，下調べのノートから目をはなさないでしゃべっていては,生徒は信頼感を起さない。「一時間分の授業内容ぐらいは，ほとんど暗誦しておくべきだ。」という厳しい声もある。イ，ロ，ハは同一内容であるが，信頼感が持てないという事は，教える者にとって致命傷であろう。長年経験を積んだ某教師が，「今でも時には下調べに，夜中の二時，三時まで過す事がある。」という言葉が思い浮んでくる。

授業中，教生が一番困るのは質問攻めであるらしい。予定の範囲を，指導計画通りに進めて，ちょうど時間になるという事が，何よりの成功であると願っているらしい。ところが，何かの拍子で生徒は活発に質問を連発する。虚をつかれて，つまらない質問にも教生は解答ができない事がある。そんな時には，教生を苦しめたといって喜ぶ生徒も相当に多い。こんな場合，いくら教生が苦労して調べてきた事を，得意になって教えても，もう生徒はついてこない。分らない時に，正直に自分の無智を告白し，ありのままの姿で生徒に接すると，多くは同情される。その人柄に好感が持てれば生徒は反抗しない。このあたりは,実に生き生きと,心と心の接触が見られて興味深く思った。しかし，その前の問題として，下調べにあたっては，どんな細かな点でも疎かにしてはならないという事を銘記しなければならない。また，教生の意見と生徒の考えが食い違った場合，教生は一応権威ある参考書で調べてあるので，生徒の質問，異見に対して「君は何かしっかりした根拠にもとずいて，そういうのか。」と，きめつけるようないい方をするのが見受けられた。生徒としては，自分の考えの正否を確めるつもりなのに，頭から叱られたような気持になって，反抗的な感じをいだいたようである。これは，態度にも関係している事だが，その底には，やはり教生の実力不足に対する虚勢が汲みとられるようである。

古文の授業の場合，教生は文法には困りはてているようである。品詞の識別もできない者，「自卑」の助動詞を「慈悲」と書く者，これらは論外であるが，古文解釈の鍵は，文法にあると思われるほど，文語文法は大切なものである。国語教師は，どうしても文法をいい加減でごまかすわけにはゆかない。

### (2) 教える技術について

今まで習う立場にばかりに立っていた者が，一夜にして教える立場に180度の転換を行ったのだから，生徒の,目立つ批判も，教生の教える技術の拙劣さに，一番多く向けられているようである。

| | 1年 | 2年 | 3年 |
|---|---|---|---|
| イ 話し方について | | | |
| いい方があいまいである。 | 15 | 3 | 2 |
| 声が小さい。 | 48 | 11 | 1 |
| ロ 教科書から離れない。 | 4 | 4 | 2 |
| 解釈だけである。 | 5 | 1 | 1 |
| 辞書的説明である。 | 12 | 2 | 8 |
| ハ 質問のしかたが悪い。 | 10 | 6 | 1 |
| ニ 要点を強調してほしい。 | 8 | 6 | 2 |
| ホ 時間の配当が悪い。 | 10 | 4 | 6 |
| ヘ 間があきすぎる。 | 4 | 3 | 2 |
| ト 板書が悪い。 | 8 | 11 | 2 |

声の小さいのは生徒の応答でも同じであって，教師という職業はよほど大きな声が必要のようである。教室が静粛であれば小さい声でもかまわないが，五十分の授業をそれで維持する事はむずかしい。女性でとても声の小さい教生がいたが，前の席にいる生徒でも，何をいっているのかよく聞きとれなくて非常に困っていたようであった。早口にしゃべる人，話のあいだに不必要なことばが癖になって入る人など，みな多くは聞きにくいものだ。

授業は，教科書を基礎において，そこから発展してゆかなければならない。従って，語句の説明が，単に辞書のままであったり，古文の授業が解釈だけで終ったりすると，「参考書があればそれで良い。教師は不要である。」という声も聞えるのである。こういう批判の奥にも，教生の広い知識とたゆみない勉強が要求されてくる。従って，技術の拙劣と同時に実力の欠如ともいうことができる。現代文を教える場合には，逆に，教科書の本文は読むだけで，あとは作者や作品の説明にばかり走りすぎる嫌いが見受けられるが，これでは勿論，生徒は満足しない。実に繁簡緩急の妙の存する所である。

生徒に尋ねる場合「ここは何が書いてありますか。」という質問が非常に多い。大意を聞く問題であるが，生徒は「小学生の質問である。」という。こういう問答で授業を進めても調子が乗らない。文の中心点を，峰から峰へと伝わってゆく授業法が望ましいようである。千遍一律の授業ということは，われわれの場合によくいわれそうであるが，わたくしも大いに反省させられた。

一時間分の進度が，予定通り終らない事はしばしばある。教生の場合，特に甚しく，ひどいのになると，予定の半分ぐらいしか進めないという事も多い。これにはいろいろな原因があるが，授業中に空白がある事が目立つ。説明がくどすぎる。てぎわの悪さという事が大きな原因になっている。そこへ，ちょっと厄介な質問でもとびだすと，収めようがつかなくなる。教師が見かねて口だしをする事もあるが，この辺の呼吸をよくのみこんで，適切に処置するには，相当の熟練が必要であろう。

黒板の字がきたないといわれる事は，国語教師としては特に辛い事である。せめてなぐり書きなどしないよう注意したい。板書が整然としている事は，授業のうまさを思わせる。生徒は，板書についてあまり多くの意見を述べてはいなかったが，板書による教育技術という事は，高等学校においても重視しなければならないと思う。

教える技術について，いろいろと述べてみたが，技術の上達は熟練にあるという事は勿論であるが，やはりその根底に横たわるものは，実力であり，情熱であるような気がする。技術を技術だけであると，あまく考える事は，十分戒めなければならない。

### (3) 服装や態度その他

| | 1年 | 2年 | 3年 |
|---|---|---|---|
| イ 机によりかかる。 | 8 | 2 | 1 |
| ロ おちつきがない。 | 6 | 3 | 2 |
| ハ 服装が悪い。 | 27 | 0 | 0 |
| ニ いばっている。 | 39 | 6 | 7 |
| ホ 生徒と離れている。 | 21 | 12 | 5 |

机にひじをもたせたり，よそ見をしてしゃべったり，やたらに動きすぎたり，全然動かなかったり，こういう態度が度を越すと見苦しく嫌になる。自然のポーズが，生徒にとけこむような態度が望ましい。これも，態度の奥にひそむ心のあり方の問題になってくるようだ。

本校では，ジャンパーの着用を禁止している。それを教生が乱したという非難は当然であろう。また一人の教生が風邪のため，たまたまレインコートを着て授業に出たのは大失態であった。本人も，どんなに自分が常識を欠いていたかを深く反省していたが，これは勿論論外の事である。

教室でいばる事は，もっとも生徒の反感を買う。出席をとる時，姓が読みにくいとか，時間の無駄だといって，番号で呼んだら，「われわれを囚人扱いにするのか。」と生徒は怒った。名前が分らなくて，「おい〃その眼鏡。」と呼んだ時も反感が強かった。「こんな事が分

らないのか。」と生徒の質問をあなどった時には，生徒はひどく誇りを傷つけられた。「いばるような者は，教師になる資格がない。」と強くいいきった生徒も相当あった。その反対に，生徒に親しみを覚え，暖かい愛情で包むような教師こそ，もっとも生徒から愛される。「われらと共に」という事は，生徒の全部の声であろう。しっかりと地に足を据えた授業のもとに，時にはユーモアをまじえ，あるいはちぢみあがらせ，自在に生徒を動かして，知らず知らずのうちに導いてゆけるような教師になる事は，果していつの日の事かと，教生がはてしなく生徒の槍玉にあげられてゆく姿を見つめながら，わたくし自身，教育のむずかしさに思いあまる次第である。生徒と一緒になって勉強するという事は，大部分の教師が，その着任のはじめに生徒にむかって挨拶もし，自らも心掛けた言葉であろう。そしてまた，それを行っている教師こそ，第一等の教師であるとわたくしは信じている。

以上，いろいろと生徒の口を借りて，教生の悪口をならべてきたが，生徒は徹底的に非難ばかりしているわけではない。教生の良い点は大いにほめている。「本職の教師と全く変らない。」という讃辞をはじめとして，「教生の御苦労に感謝する。」「大変おもしろく，よく分った。」等々。相当こんな言葉のあった事を注意したい。

### 教生の反省から

彼等は教壇に立つのは初めての経験である。従って教える技術も，その態度も，そしてまた学力も，至って未熟である。しかし，その真剣さ，まじめさは敬服に価する。一回毎にその授業ぶりを厳しく反省し，同僚の意見を受け入れ，教師の注意をかみしめて，次の授業に失敗を繰返さないよう，細心の注意を払っている。その日の過ちを，明日の前進の糧にする心掛けこそ，真の教育の姿であるとわたくしは信じている。

彼等が，口を揃えてもっとも痛感している事は，学力の不足である。「もっと下調べをよく行わなければならない。」「教科書だけやったのでは駄目である。」「教材を十分にこなしていなかった。」「ふだんの広い教養が必要である。」という反省を全員が行っている。

次に，教室における勇気，自信を持たなければならないという事も強調していた。「はじめはただ夢中にしゃべっていただけだった。」「生徒の顔は何も分らない。」「ともすると自分のひとり舞台に終りがちだった。」という言葉が，「なんとかして，生徒に分らせようとする努力を払った。」というまでには，相当の苦労のあとが見られる。

教え方についての反省は，次の時間に改められると思ってか，彼等はあまり重く見ていないようである。「質問のしかたがまずかった。もっと生徒の答え易いような，具体的な問を出すべきだった。」「未節の事にばかりこだわって，全体をまとめる注意が足りなかった。」「随筆とエッセイとの関係をごたごた述べて，結局何をいったのか自分でもはっきりしなかった。」「語句の解釈と，文法の説明に終始して，俳文の妙味を味わせる事ができなかった」等々。しかし，こういう問題が次の授業ですぐ改められるかというと，なかなかできない。こういう事が，結局教育の本道に通じるのであって，もし彼等の，こういう反省があまいものであったら，厳に注意しなければならないと思う。これらを，小さな，一寸した技術の問題だといって，かたづけてしまったならば，すぐれた教師とはなれないであろう。技術は本質に直結する。技術の反省が，教育の本質にまで向けられなければ，教育家として落第であるとわたくしは思う。

最後に，そしてもっとも大切な事はその人柄——人格という事である。教師の心はただ

ちに生徒に反映する。教える立場を強く守ろうとすると，「いばった奴だ。」と生徒は反撥する。大事にしすぎると，「自信がなくて頼りにならない。」とのしあがる。教師の姿に作意が見られると，生徒は決して近よってこない。「運動場で，生徒とスポーツをやったり，話しあったりした時の気持を，授業中でもかもしだしたい。」と告白した教生もいた。「わたしの本当の気持を，少しは理解してくれる生徒もおった。」ともある教生はいった。生徒ととけあいたいという気持は全員の心であろう。ある教生は，態度も弱々しく，教師の威厳など全然感じられなかったので，授業のあるたびに，同僚や教師から注意されており，本人も三週間，この事で悩んでおったようであるが，「こういう態度は自分の生まれながらの姿であって，無理に威厳を保つなどは到底できない。ただ，自分は生徒にとけこんで，一緒になって勉強しようと思っているだけだ。これで自分は間違いではないと信じている。しいて威厳を飾る必要はない。」という結論をだした。彼の真剣な悩みと，かたい信念は，結局生徒の心にもうつって，はじめは「W型」とこばかにしていた生徒も，一番好感が持て，実力もあり，おもしろい授業であるという印象を持ったようである。教育の場は，強い者が勝つという原則は通用しない。弱い者でも敗者とはならない。真の勝利者は，心から生徒を愛し，情熱を打ちこんで教育に取り組んで行く者であるという事実を，教生自身が，この三週間の短い実習期間で，どうにか会得してくれた事は，何よりも貴い体験であった事と思う。これが教育の出発点であり，最後までこれを追求してゆく姿こそ真の教育であると思う。

## おわりに

短い三週間は終った。その間，教生達は実によく勉強した。一時間分の授業の準備のため，二時間しか眠れなかったという教生もおった。「こんなに苦労したのは過去十数年の勉強生活でも経験した事がない。」と洩らした者もいる。この辛さに堪えられなくて，中途で実習を放棄した女性も一人おった。大きくいうなら，この三週間で彼等が生きんとするために苦しんだ，きびしい人生の営み——金も力も何の価値もない——美しく，貴く，そしてはかない人生の真実に触れ得たように感じられて感慨に堪えない。社会にあっては，わたくしが無力な一個人であるように，彼等もまた平凡な一市民であるかも分らない。しかし，五十人の生徒と向いあって，学問を語り，人間を話しあい，心と心との交わりに，限りない楽しみを見出そうとする姿のなかには，貴い魂のありかが窺われる。美しい教育家の面影——わたくしの理想像を，この教生達の心の奥に見いだして，わたくしは，心の濁りが払われたような気がした。世阿弥は「時々の初心忘るべからず。」という名言を遺した。年々，新しく巣立つ若い教師達，彼等教生が，人生の第一歩を踏みだしてゆく時の，あの清く貴い心を，いつまでも持ち続けて，たえず前進してくれる事を，心から願うとともに，教師の職に身を奉じてすでに十五年，次第に醜い殻におおわれがちになって，空しく年月を送っているわたくしも，今この時の心を深く反省して，明日の前進に励みたいと念じている。現在の自覚反省の心を忘れると，将来の進歩向上などはおろか，はじめの頃の位よりも退くと断定した，十四世紀の名人，世阿弥元清のことばを，教生と共にもう一度深くかみしめてみたいと思う。